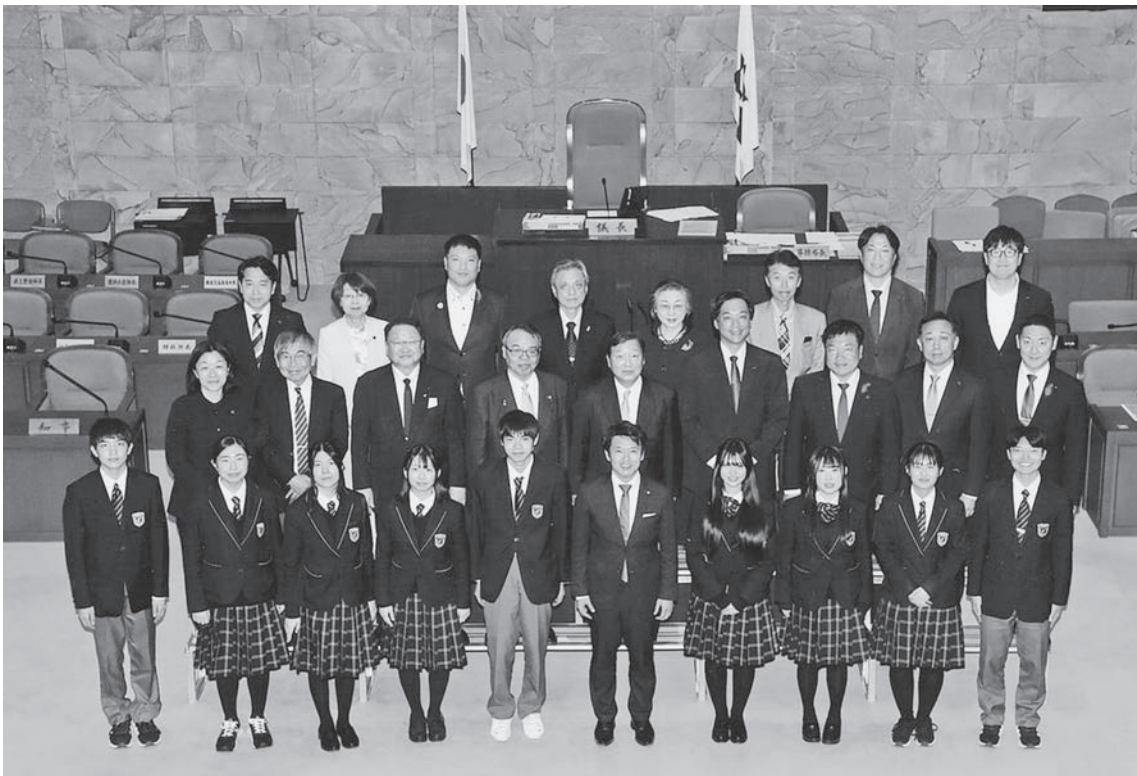


4. 参加高校生からのメッセージ及び政策提案

(1) 八戸工業大学第二高等学校

やきとり県あおもり



政策を考えた八戸工業大学第二高等学校の皆さんから、メッセージをいただきました！



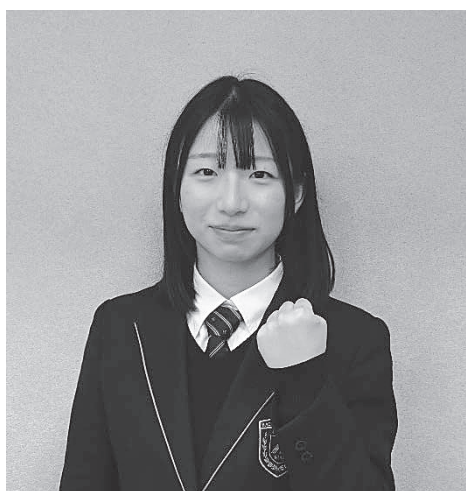
いしがめ りょうすけ
石亀 涼祐（3学年）

私はねぎまが好きです。それゆえに鳥インフルエンザの発生を聞くと心に痛めていました。しかし、このやきとり県を調べて、個人でできる鳥インフルエンザ対策を知り、自分たちも貢献できることをうれしく思いました。

青森県の課題について考えるいい機会になりました。他の学校の政策を聞き、自分たちが考えていなかった新たな発見もすることができました。高校生と議員が議論することはないのでとても貴重な経験になりました。高校生模擬議会に参加できて良かったと思いました。よりよい青森県にしていきたいです。



くどう みこと
工藤 美琴（3学年）



こふじ ももか
小藤 百香（3学年）

高校生模擬議会に参加し、青森県の課題を自分ごととして考える大切さを実感しました。「やきとり県あおもり」という視点から地域の魅力を発信するというユーモアのある提案を考えていく中で青森県は何もない！という考えが変わりました。

今回、高校生模擬議会に参加し、普段、新聞やニュースでしか見ることのなかった「議場」という場所で、自分たちの意見を直接届けるという貴重な体験をさせていただきました。最初は緊張しましたが、一人の青森県民としてそれぞれの意見に関心を持ち、発表することができました。今回の経験を大切にしていきたいです。また、普段のニュースに興味・関心を持ち、今、自分たちができることを考え、行動に移していきたいです。



しんやま あいこ
信山 愛子（3学年）

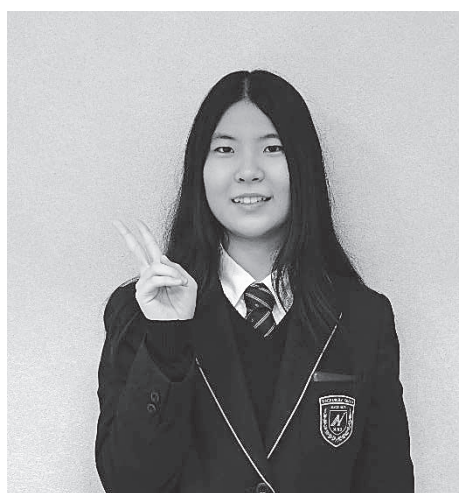


たかはし はるか
高橋 晴夏（3学年）

この高校生模擬議会に参加するにあたり、青森県の現状を深く知ることができました。今回提案させていただく案で少しでも青森県のためになれるようにできたとと思います。学生が県復興や観光、地域産業の重要な所を担うことはなかなか難しいところですが、いずれそうなれるように、これからもこういった活動が今までより活発に行われると良いなと思います。

今回高校生議会に参加して、青森県の状況と議会の様子を知ることが出来ました。最初、青森の活性化についてどうするべきかと考えた時、やきとりという結果につながり、これは果たして青森が成長するためのものになってくれるのか少し心配でした。しかし、この活動を通して青森の良さを知り、身近に感じるようになったことで青森に住んでいて良かったなと思いました。本番では緊張しましたが、自分なりに伝えられるように言い方、読み方を少しでも工夫して出来たのかなと思います。これからはボランティアという形から自分ができることを少しでも自分から進んで出来るようにしていきたいと思います。

良い経験になりました。ありがとうございました。



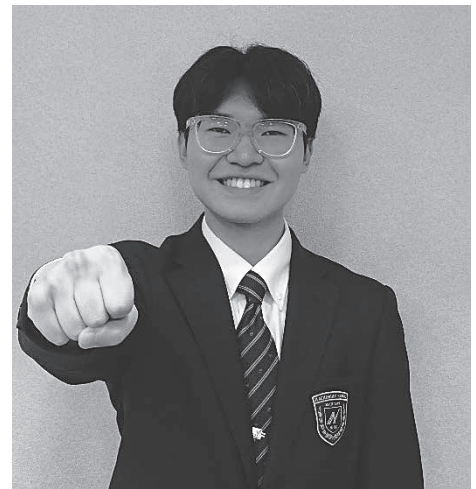
たかはし みゆ
高橋 未夢（3学年）



たけこま ゆつき
竹駒 結月 (3 学年)

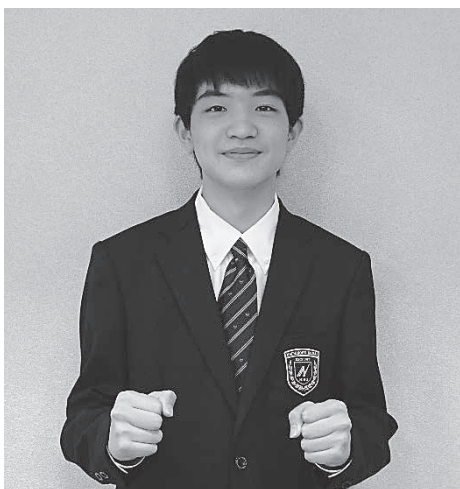
昨年の夏に藤井剛先生をお迎えして実施したグループワークを経て、青森の活性化に携わりたいと考え、本活動への参加を決意しました。約半年間、青森県の自然や産業に着目し、地域の活性化について仲間と一緒に考えを深めてきました。青森について深く考える機会はこれまで多くありませんでしたが、この活動を通して、これまで気づかなかった魅力や可能性に出会うことができました。その中で、青森のことがより好きになり、「もっと知ってほしい、届けたい」という思いが強くなりました。これからもこのような高校生模擬議会の取り組みがつづき、若い世代が地域と向き合う機会が広がっていくことを願っています。そして、私自身も、県外の方々やこれからを担う若い世代に青森の魅力を伝えられる大きな存在となれるよう、日々色々な視点から、青森県の活性化のアイデアを出し、実際に行動に移していこうと思います。

リハーサルの時から緊張したが、本番で演壇に立つと、伝えたい気持ちが緊張に勝ち、自信を持って発表できた。議長の方がニコニコしていて発表しやすかった。青森県のトップの方々へ自分たちで考えた政策を語ることができてとても貴重な経験だった。県や国を動かしていく未来の自分を想像することが出来た。これからも青森県をよくしていくにはどうしたらよいか考えていこうと思った。

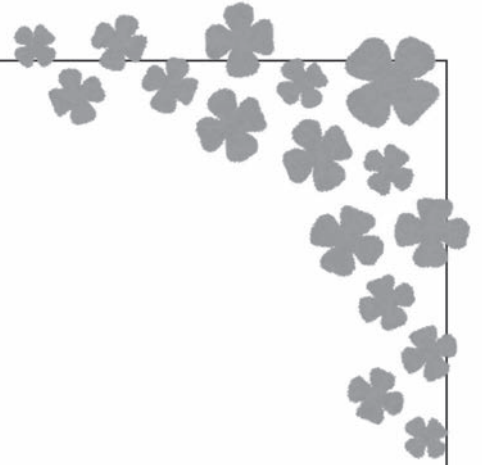


むらた こうだい
村田 晃大 (3 学年)

今回、高校生模擬議会に参加して、これからの青森をどうするべきなのか、3校の政策を聞きました。医師が不足しているため看護師育成の政策や縄文時代からSDGsを学んで未来につないでいく政策、やきとり県あおもり政策など今青森で有名、活発なものを県内外へ広げていくという活動をする事で県の魅力の再発信につながり、さらに青森が有名になっていくことができると思いました。



なかぐき しょうま
中岫 翔真 (1 学年)



青森県高校生議会の意義

八戸工業大学第二高等学校 教諭 坂上尚子

主権者教育に携わる高校教員として日々感じるのは、生徒が「社会の担い手である」という自覚をどのように育むかの難しさである。多くの生徒にとって、政治や社会の問題は依然として遠い存在であり、選挙権年齢が引き下げられたとはいえ、「自分の一票で何かが変わるのか」という実感は乏しい。そのため青森県高校生議会は、身近な課題と政治のつながりを意識する格好の機会である。青森県の課題を題材に解決策を考え、討論をすることで、合意形成の過程を体験し、生徒の地方自治に対する関心は明らかに高まっていると感じている。

一方で、私たち教員が中立性をどのように保つかという課題も大きい。特定の価値観を押し付けることなく、多様な意見を尊重する姿勢を示しながら議論を促す必要がある。そのためには、単に知識を伝えるのではなく、生徒自身が情報を吟味し、自らの考えを形成する力を養う支援が求められる。また、SNS の普及により情報環境が複雑化する中で、フェイクニュースを見抜く力や批判的思考力の育成も不可欠である。

主権者教育は短期間で成果が見えるものではないが、生徒が社会と主体的に関わろうとする姿勢を少しでも育てられたと感じる瞬間に、その意義を実感する。将来、生徒たちが自らの意思で社会に参加し、多様な人々と協働しながらよりよい社会を築いていくことを願い、教室内外での一つ一つの実践を積み重ねていきたい。

やきとり県あおもり

八戸工業大学第二高等学校

私たちは「やきとり県あおもり」の推進を提案します。

目次

- 1, 概要
- 2, 経緯
- 3, 観光業の活性化
- 4, 畜産業の活性化
- 5, 人材交流の活性化
- 6, まとめ

1. 「やきとり県あおもり」とは

青森県の畜産の強みである鶏や青森県で生産される焼鳥のタレを活かし、青森県を「やきとりの県」として全国に発信する取り組みである。

本県の2024年度1戸あたりブロイラー飼養羽数全国4位。1戸あたり採卵鶏飼養羽数全国第1位。そして、全国県庁所在地焼き鳥購入金額第1位の実績を生かし、焼き鳥を中心に、畜産業、観光業、サービス業など、様々な産業の振興を図り、さらには他県と人材交流を行うことで、地域への愛着を深めようという政策です。(1)

1



うどん県〇〇や〇〇市の餃子、〇〇市のラーメンの模倣ではないかという意見もあるかもしれませんが、私たちの提案は、ただ焼き鳥を大量に消費して、全国的な注目を集めることだけが目的ではありません。焼き鳥を通じて、青森県民が青森に誇りを持ち、心豊かに生活できるようになることが最大の目的です。

鳥を飼い、鳥を食べることが大好きな青森県民の力を結集し、焼き鳥で日本統一を目指しましょう。

2. 「やきとり県」に至った経緯

青森県は「りんご県」として有名、他には、にんにく、ごぼう、長いもなど有名。
これらはすべて「青森県産品」として生産量や品質で有名。
では、青森県民がよく消費している食べ物は何？

調べてみると…

青森県(青森市)は、焼き鳥の消費量で全国1位
(2024年総務省データ)

・養鶏業の経営規模が大きく、食用の鶏肉だけでなく鶏卵も盛ん、安定した畜産基盤を持っている。
・宮内庁御用達の「青森シャモロック」、「桜姫」など、ブランド鶏や地鶏が多数存在している。
・上北農産加工の「やきとりのたれ」で、家庭でも美味しい焼き鳥が食べられる。等々、

焼き鳥を、観光・食・交流・畜産のシンボルとして位置づけることで
青森県の新しい魅力を創出できるのでは！？

2

そもそも、私たちが本案を提案するに至った経緯を簡単に説明します。昨年8月、藤井剛先生をお迎えして実施したグループワークを経て、高校生模擬議会参加希望者8名が集まりました。私たちは、活性化とは何かから議論を始め、私たちがなりの青森県活性化を次のように定義しました。それは、今、青森に住む人達が、心豊かに生きられるようになることです。



そのためには、青森の強みを生かしつつ、青森県民、中でも人口減少が著しい若い世代の県民が、青森県に対して誇りを持てるようになることが必要だと考えました。そしてたどり着いたのが、焼き鳥です。

どうぞ、好きな焼き鳥の味と姿を思い浮かべながらお聞きいただければと思います。

今回は、観光、畜産、人材育成の3分野について、焼き鳥を軸にした活性化策を提案します。(2)

3. 観光業の活性化

「あおもり＝やきとり」のイメージ定着

観光客の増加

やきとりと言えば青森！
というイメージを定着させる。

・やきとり食べようキャンペーンの開催

・青森ゆかりの有名なオススメ焼き鳥や焼き鳥屋さんの紹介

・美味しい焼き鳥のタレ
(青森県産)のPR

焼き鳥は屋台や食べ歩きとも相性が良い

→祭りやライトアップイベントなどで一年中楽しめる青森のやきとりのPR

だれでもいつでも

大人から子どもまで、誰でもいつでも楽しめる「やきとり県あおもり」で畜産、観光、飲食業の振興を！！

3

まず、観光分野における活性化策です。目標は、焼き鳥を食べに青森に来る人を増やすことです。その前提として「あおもり＝やきとり」のイメージを県内外に定着させる必要があります。そのために、以下のような方策を提案します。

1つ目。まず、青森が焼き鳥消費量全国1位であること、今後、青森県の焼き鳥をブランド化していくことを青森県民に浸透させる「大好きやきとりキャンペーン」です。(3)



具体策は次のようなものです。ねぶた祭りや弘前さくらまつり、三社大祭、冬のライトアップイベントなどで、青森県産焼き鳥屋台を出展し、観光客の皆さんに、青森の焼き鳥をPRする。焼き鳥は食べ歩きと相性がよく、夏でも冬でも楽しむことができるので、他のイベントとの組み合わせが自由自在であるという強みがあります。

(3)

3.観光業の活性化

「あおり＝やきとり」のイメージ定着

やきとりと言えば青森！
というイメージを定着させる。

・やきとり食べようキャンペーンの開催

・青森ゆかりの有名人の
オススメ焼き鳥や焼き鳥
屋さんの紹介

・美味しい焼き鳥のタレ
(青森県産)のPR

観光客の増加

焼き鳥は屋台や食べ歩き
とも相性が良い

→祭りやライトアップイ
ベントなどで一年中楽し
める青森のやきとりのPR

だれでもいつでも

大人から子どもまで、誰
でもいつでも楽しめる
「やきとり県あおり」
で畜産、観光、飲食業の
振興を！！

3

次に、やきとり県アプリの作成。アプリのコンテンツとして、1、青森県の著名人が好きな焼き鳥やお店を紹介する。例えば、県知事、副知事、弘前大学の学長、県内の市町村長、芸能人などを考えています。2、「青森焼き鳥屋さん総選挙」の実施。3、焼き鳥クーポンの配布。4、「青森焼き鳥屋さんマップ」の公開。5、家でつくれる美味しい焼き鳥レシピの公開（ユーザーが公開することも可能）。

以上のような取組で、何だか青森の焼き鳥が気になるぞという雰囲気を、まず県内から広めていきます。(3)



2つ目。次に、県外へ「やきとり県青森」を売り込むキャンペーンを実施します。具体的には次のようなものです。大手スーパーの青森県産品フェアなどで、県産地鶏やブランド鳥、それらを用いた焼き鳥のPR。SNSやマスメディアを通じた「やきとり県青森」のPR。具体的には、インフルエンサーや焼き鳥好きな芸能人とのコラボ。

そして、全国から焼き鳥屋さんが集まり、美味しい焼き鳥を楽しめるイベント「全国やきとりフェス」を青森県で開催します。このフェスにはある仕掛けを施します。



そもそも、私たちが焼き鳥をPRするにあたり、懸念していることがあります。それは「やきとり県青森」と健康的な生活の両立です。焼き鳥そのものに罪はありませんが、焼き鳥の食べ過ぎが塩分の取り過ぎ、肥満児増加や、お酒の飲み過ぎに繋がり、生活習慣病の危険性が高まってしまう可能性は否定できません。

よって「やきとり県青森」は、県民の血圧低下や健康寿命の延伸を目指す健康医療福祉部の方々からは、必ずしも賛成できない政策だと思います。



そこで、焼き鳥に対抗する健康メニュー、野菜串焼きの登場です。

「やきとり県青森」否定派の健康増進家が推進する、野菜焼き（塩分控えめ）と、焼き鳥の対立構造をあえてつくり出します。そして、やきとりフェスで来場者にどちらが美味しいか投票してもらいます。これは青森県に限らず、全国各地の美味しい野菜たちをPRする機会にもなりますし、魚介焼きの参入もあっても良いと思います。



やきとりフェスとはいえ、各地域の美味しい県産野菜や魚介類の串焼きも販売する、実質的には全国串焼きフェアであり、健康志向の高い人々の関心も集められると考えます。

以上のような取組で、青森の焼き鳥のPR、そして、観光客の増加を目指します。

観光分野は以上です。



畜産分野における目標は、安定した生産量と畜産環境を守ることです。

私たちは、青森県産焼き鳥の消費拡大と、畜産業の振興に貢献したいと考えています。

しかし、青森県内で消費される焼き鳥の中には、外国産・他県産の焼き鳥も含まれています。これは当然のことであり、むしろ安くて美味しい焼き鳥を入手できている可能性もあります。

4. 畜産業の活性化

県産鶏肉の使用拡大で県内の養鶏業が安定。
ブランド鶏の知名度や付加価値を高めることも可能。
もちろん他地域や外国産の焼き鳥も食べているが、焼き鳥全体の消費量が上がれば、県産焼き鳥の消費量も増加するはず。

**最大の脅威は「鳥インフルエンザ」
鶏肉、鶏卵の生産量低下で養鶏業の弱体化に陥る可能性大**

全県体制・全県民体制で鳥インフルを防ぐ！

・鳥インフルの脅威について、子どものうちから学ぶ
・ひとりひとりができる鳥インフル対策を実行する など

目標は
鳥インフル
対策先進県

4

ですから、私たちが提案する「やきとり県青森」で想定しているやきとりは、青森県産に限られません。しかし、青森県における焼き鳥消費量が増え、観光客が増加するとすれば、青森県産焼き鳥の消費量もおのずと増加し、結果的に青森県の畜産業に貢献することが可能だと考えています。（4）

4.畜産業の活性化

県産鶏肉の使用拡大で県内の養鶏業が安定。
ブランド鶏の知名度や付加価値を高めることも可能。
もちろん他地域や外国産の焼き鳥も食べているが、焼き鳥全体の消費量が上がれば、県産焼き鳥の消費量も増加するはず。

**最大の脅威は「鳥インフルエンザ」
鶏肉、鶏卵の生産量低下で養鶏業の弱体化に陥る可能性大**

全県体制・全県民体制で鳥インフルを防ぐ！

- ・鳥インフルの脅威について、子どものうちから学ぶ
- ・ひとりひとりができる鳥インフル対策を実行する など

目標は
鳥インフル
対策先進県

4



一方、養鶏業の最大の脅威、それは鳥インフルエンザです。先日、東北町の養鶏場で高病原性鳥インフルエンザが発生し、約23万羽もの鶏が殺処分の対象となりました。これほど大規模な命が失われるのが今の現実です。

鳥インフルエンザは、養鶏業を弱体化させるだけでなく、その対応に当たる人々に身体的・精神的にも過度な負担を与えます。(4)

実際に五戸町で、青森シャモロックを支えてきた主要な養鶏場が、経営悪化により自己破産に追い込まれるといった、痛ましい事態も起きています。こうした連鎖は、地域の雇用や伝統ある食文化をも消失させる、深刻な脅威となっています。



そのため、全県・全県民体制で鳥インフルエンザを防止するという政策を提案します。

具体的には、鳥インフルエンザがどんなに恐ろしいものかを正確に伝え続け、人々の意識を高める啓発活動の実施。一人一人ができることと、子どものうちから鳥インフルの危険性を学ぶことなどが考えられます。(4)



なお、一人一人ができる政策はとても簡単で、ごみをカラスに荒らさせない、野鳥に餌付けしない、鶏を自宅で飼うときは野鳥と絶対に接触させない、うっかり野鳥にふんをかけられたらよく洗う、うっかり野鳥のふん踏んだら靴を消毒する、などです。

以上のような取り組みで、安定した生産量と畜産環境を守り、鳥インフル対策先進県を目指します。

畜産分野は以上です。



最後に、人材育成分野の活性化案です。

青森県では、若者の県外流出が問題となっています。この問題の根源には、青森県の若者が青森のことをよく知らないために、青森に魅力を感じない。SNSやインターネットで知る都会の情報の魅力が強いため、より青森に何もないと感じてしまうなどの問題が潜んでいると考えます。

5.他地域との交流

やきとりを軸にした青少年交流の実施

福岡県や福岡県、鹿児島県や愛媛県など、焼き鳥文化が盛んな他地域と連携し、青少年の人材交流を行う

＝「羽ばたけ焼きとり！色とりどりプロジェクト」

- ・自分の地域の焼き鳥の紹介、他地域の焼き鳥の理解
→地域理解を深め、自分の地域を客観的に見直すきっかけ
- ・ワークショップを実施して、焼き鳥の新しい可能性の発掘
→対話力や協働力が強まるだけでなく、新しいイベントや新しい食べ方を考えて広めるきっかけ

➡ 青森県を見直し、愛着を持てるようになる 5

そこで、焼き鳥文化が盛んな他地域、例えば愛媛県や福岡県、鹿児島県との交流を通して、若者が他地域を知り、青森を見つめ直す機会とすることを提案します。焼き鳥を単なる食文化としてではなく、人と人、地域と地域をつなぐ入口として活用し、焼き鳥を通じた国内交換留学を実施します。(5)

5.他地域との交流

やきとりを軸にした青少年交流の実施

福岡県や福岡県、鹿児島県や愛媛県など、焼き鳥文化が盛んな他地域と連携し、青少年の人材交流を行う

＝「羽ばたけ焼きとり！色とりどりプロジェクト」

- ・自分の地域の焼き鳥の紹介、他地域の焼き鳥の理解
→地域理解を深め、自分の地域を客観的に見直すきっかけ
- ・ワークショップを実施して、焼き鳥の新しい可能性の発掘
→対話力や協働力が強まるだけでなく、新しいイベントや新しい食べ方を考えて広めるきっかけ

➡ 青森県を見直し、愛着を持てるようになる 5

事業名は「羽ばたけ焼きとり！色とりどりプロジェクト」です。目標は、青森に生まれて、焼き鳥が美味しくてよかったなど、若者が感じられるようになることです。(5)



具体的な交流案は以下のようになります。高校生や大学生が夏休みや冬休みなどの長期休業を利用して参加します。相手地域の焼き鳥を体験したり、地域の特色を学んだりすることはもちろん、自分の地域の焼き鳥や特色をプレゼンし、相互理解を深めます。また、グループワークを実施し、協力して、焼き鳥文化を発展させる方策や活性化策を考えます。

農業体験や農家ホームステイも実施し、参加者は両方の立場を経験します。(5)



これらの経験は、青森県やその文化を客観的に捉えることに繋がり、良さを認識することにも繋がると考えます。自分の地域の良さを認識することで、青森に対する愛着が強まり、進学や就職で一度県外へ出たとしても、また戻ってこようと思う気持ちや、県外からでも青森県を応援しようとする気持ちが生まれると思います。また、交流相手先の若者たちの中にも、青森を好きになってくれる人が出るかもしれません。つまり、関係人口を増加させる効果もあると考えます。(5)



「やきとり県青森」の強みは、あらゆる分野に広げられることだと思います。

りんごを始め、ながいもやごぼう、ホタテなど、青森県にはすでに美味しいものがたくさん存在します。そこに新たなキャラクターとして、焼き鳥を加えることが、青森県全体の活性化に繋がると思います。

6.まとめ

「やきとり県あおもり」

- ・ 県外へのPRで観光業を盛り上げる
- ・ 畜産業を守る
- ・ 県民自身が青森に誇りを持つきっかけ

「青森の焼き鳥が一番おいしい！」と自信を持って言える体験は、若者が地元を好きになり、将来的に地元に残る、または地元に戻る理由の1つになると考えられる。

6

何より青森県民が青森の焼き鳥が一番おいしいと言えることは、青森県民が自信を持ち、豊かに生きていくことに繋がると考えます。(6)

以上で、八戸工業大学第二高等学校の提案を終わります。

(知事からのコメント)



提案を聞いて、砂肝が食べたくなくなりました。非常にユニークな提案で、そして何よりも、焼き鳥をみんな食べたくなくなったのではないかなと思います。提案というものはそういったポイントが大事で、提案した相手方の感情を揺さぶったり、行動変容を促したりすることができるかということが、まず一般論として本当に大事なことです。それが何よりもできていたような気がするので、素晴らしい提案だったと思います。

また、販売・コマーシャルの仕方という観点でも、私たちにも多くの示唆をいただき、考えさせられる点も多くありました。ありがとうございました。

よく「青森県には何もない。」と言う人たちがいます。これは県外の人に限らず、県内の大人もそういうことを言ったりします。ただ私自身は、仮に何もなかったとしても、何もないということはもちろんないし、様々な余白があり、そして皆さんにとっては挑戦する可能性のある県だというふうにも受け止めています。ですから、「ない」ということを追求していくよりも、何か「ある」ということに可能性を感じて欲しい。今回はそれが焼き鳥だったのかなと捉えています。

皆さんも、今回の提案をきっかけに、「ない」を追求するよりも「ある」を見つけ、そしてその高校生活や人生を、この「ある」を大切に送っていただきたいと、発表を聞いていて思いました。

ありがとうございました。



●井本 貴之 議員（自由民主党）

（井本議員）



今日は3校とも大変素晴らしい発表で、堂々としており、非常に板についた発表だったと感じさせていただきました。

私からは八戸工業大学第二高等学校の「やきとり県青森」の提案について質問をさせていただきたいと思います。

本県を「やきとり県」としてブランディングして、そして全国に本県をPRするということでしたが、県外の皆さんに青森県がやきとり県であることを認識してもらうために、どのような内容を、どのような手段で行うことが最も効果的と考えているかお伺いいたします。

（答弁）



県外の皆さんにPRする方法は多数あり、方法によってターゲットになる層が異なるため、複数を組み合わせて行うことに効果があると考えます。

大手スーパーの青森県産品フェアは年配の方や主婦の方々、SNS戦略は若い人たち、全国焼き鳥フェスの開催は、家族連れや旅行好きの人たちがターゲットになると思います。テレビ番組でやきとり県青森を取り上げてもらう方法も考えられ、幅広い世代にPRできると考えます。

やはりその中でも重要なのは、SNSやインターネットを用いた戦略だと考えます。具体的には、インターネットの広告に、青森県の焼き鳥や鳥肉のPR広告を流すことや、青森にゆかりのある有名人やインフルエンサーに、やきとり県青森をPRしてもらったり、美味しい焼き鳥屋さんがあることを拡散してもらったりすることが考えられます。

より多くの人に注目してもらう方法として、何かのイベントと関連させてPRする方法がいいと考えます。例えば、岩手県一関市のような、東京ガールズコレクションを誘致し、若い世代に人気のモデルやインフルエンサー、アーティストなどに青森県に来てもらいます。そして、その人たちに青森の魅力を発信してもらいます。その1つとして、やきとり県青森や県産鶏肉をPRしてもらうという方法です。これは東京ガールズコレクションが中高生にとって魅力的なイベントであるため、単純に若者が喜ぶイベントを開催するという意味もあります。

特別に新しいイベントは費用も労力も必要なので、それが難しい場合には、ねぶた祭りや弘前さくらまつりに招待して、その代わりに、青森県の魅力を発信してもらうという方法も可能だと考えます。

（井本議員）

ありがとうございます。すぐに企画を作って動き出すには、まだまだ練らないといけないことなどたくさんあると思いますが、思考のトレーニングとして、すごく資料も発表も段取りよく組まれていたなと感じておりました。次はもっと、自分たちの目線に合わせたことでもいいと思いますので、何かそういったことを企画し、自分でやってみるということにもチャレンジしてみたいかなと感じながら見させていただきました。ありがとうございました。

（小笠原議員）



青森県は様々な統計が 1 位であります。例えば、ソーセージの購入量やカップ麺の購入量など、意外なものが 1 位です。今回は焼き鳥購入量が 1 位ということで、こういった提案がありました。

お話の中にもありましたが今月 22 日、青森県内でも鳥インフルエンザが発生しましたが、事業者の方々や養鶏の方々には本当に気を使っています。冬になると従業員は湖を通らないようにしたり、車も消毒したりしますが、それでも発生してしまいます。

青森県の畜産業を守るために県民総ぐるみで、鳥インフルエンザに立ち向かうという視点はとても大切だと思いますが、多くの一般県民が個人でできる鳥インフルエンザ対策というのがなかなかわからない、知らない中で、それをどのように、県民一人一人に実践してもらおうと考えているのか、お聞きしたいと思います。

（答弁）



鳥インフルエンザは渡り鳥などが運んでくるものなので、それを人の手で完全に防ぐことには限界があります。ですので、一人一人ができる鳥インフルエンザ対策はないと考えている人も多いかもしれませんが、実はできることが様々あります。

具体的には、ごみをカラスなどに荒されないように捨てる、野鳥に餌付けしないなど、非常に簡単なことです。まず、これらの行動が鳥インフルエンザ防止に繋がることをしっかりと県民に伝える必要があります。そのための方法は、地道な啓発活動を繰り返すことが一番良いと考えます。ごみは決められた日の朝に出すこと、バーベキューなどのごみを放置しないこと、たとえウミネコやハクチョウなどであっても餌付けをしないことなどを、ポスターやテレビCM、チラシなどで伝え続けます。

また、鳥インフルエンザについて、小学校の地域学習に盛り込み、学校で一人一人ができることを学習するなども考えられます。

また、夏場の海水浴場やキャンプ場など、人の食べ物の残りがカラスに荒らされてもおかしくない状態で放置されている危険な場所があります。そのような場所では、ごみの管理を徹底することが必要です。蓋付きのごみ箱を設置する、防犯カメラを設置してルールを無視したごみ捨てを抑止する、などが考えられます。

人のごみを適切に管理することには、人の食べ物の味を覚えさせる危険性を防ぐという点で、クマ対策にも繋がる可能性があります。

個人ができる鳥インフルエンザ対策は、実はとても簡単で常識的なことでもあります。しかも、それを一人一人が実践することには、住みやすい地域社会づくりや、他の野生動物との共存にも効果があると考えます。

(小笠原議員)

ありがとうございました。お話のとおり、個人でできることは意外と簡単だったりします。できることが本当はあるのに、知らないということがあったりして。おそらく、今回のこの「やきとり県」の提案をする前は、どういった対策ができるのか、皆さんもわからなかったかもしれません。知らなかった、調べることもしなかったかもしれないですが、今回こういった提言をする機会があり、アンテナを張って、「焼き鳥は、青森が購入量 1 位なんだ」と知り、そこからどういったことができるのかにつなげることで、見えてくることがあったと思います。

「何々が盛り上がっている」とか「青森ナンバーワンだ」というような、良い話はみんな好きです。しかし、地域を守っていく、青森を支えていくということに本当に重要なのは、その産業をどう守っていくのか、災害をどう防いでいくのかということだと思います。

今回の八戸工業大学第二高等学校の皆さんの発表は、そういった前向きな提言もありながら、かつ、何かあったときにどう防いでいくのかという、2つの視点がきちんと取り入れられていてすごく素敵だなと思いました。日頃から様々なアンテナを張り、こういった提言をしていく、アイデアを出していく。「ない」じゃなくて「何があるのか」ということを意識しながら、生活していったほうがいいです。そして、もしかすると卒業後、県外へ出てしまうこともあるかもしれませんが、青森のことをずっと心に持って、一緒に、元気のよい青森をみんなで作り上げていければと思っていますので、よろしくお願いします。

